

## ダニエル書 - 第5

七十年

Jeff Pippenger

2023-11-29

ヨヤキムはユダの最後の三人の王のうち最初の王であり、彼がバビロンに征服されたとき、南王国にとって七十年にわたる隷属が始まった。その七十年は、聖書の預言における最初の王国であるバビロンが支配する期間を示している。イザヤ書第23章では、ツロの娼婦が象徴的な七十年のあいだ忘れられるとされ、その七十年は預言的に「一人の王の日々」として特定されている。聖書の預言では、王は王国を意味し、七十年に相当する期間を持つ預言上ただ一つの王国はバビロンであった。

その歴史の中で、教皇制を表すツロの淫婦は忘れ去られるであろう。象徴的な七十年の終わりに、彼女は再び思い起こされ、出て行って地上のすべての諸王国と姦淫を行う。霊的な姦淫とは、政教一致という不法な関係を指す。象徴的な七十年の終わりに、教皇制は、ツロの淫婦が姦淫を行う地のすべての王たちを代表する国連と関係を結ぶことになる。象徴的な七十年の間に支配する王国は、二本の角を持つ地の獣であるアメリカ合衆国である。

ダニエル書の第1章から第5章は、バビロンの七十年の歴史を概説しており、したがってそれらの章は地の獣の二本の角の双方の歴史を表している。第4章と第5章は、バビロンの最初の王と最後の王を示しており、この二章を合わせると、地の獣とその二本の角の歴史が明らかにされる。二本の角と地の獣そのものの裁きは、最初の王と最後の王の裁きによって表されている。ネブカドネツアルの裁きは「七つの時」の追放であり、彼は草と露で二千五百二十日のあいだ野獣として生きた。ベルシャザルの裁きは壁に書かれ、二千五百二十という数に等しいとされ、こうして地の獣とその二本の角の裁きがレビ記26章の「七つの時」によって表されていることが示された。これは二人の王の証しに基づいており、その二人の証人は初めと終わりを表している。

「七つの時」はアドベンティズムにとっての躓きの石であり、そのため、見ようとする者にははっきり見えるほどそこにあるのに、認められない。これは七十年間君臨した国（バビロン）への裁きの象徴であり、また象徴的な七十年のあいだ君臨する王国への裁きの象徴でもある。ウィリアム・ミラーがレビ記二十六章の「七つの時」の理解を提示したとき、彼はダニエル書第四章におけるネブカドネザルが獣として生きた二千五百二十日を、レビ記二十六章の「七つの時」を支持する予言的証人の一つとして用いた。「七つの時」はゼカリヤ書第四章における礎石であり、同時に頭石でもある。イエス、ホワイト夫人、イザヤ、そしてペテロは、それを隅のかしらの石となる石として指し示している。これは聖書預言の冠たる教理であるが、第三の天使の使者であると自称する者たちには、本質的には見えていない。

ダニエル書の最初の六章を考察し始めるにあたり、冒頭から「七つの時」が示されていることを認識することが重要です。ヨヤキムがバビロンに敗れたとき、七十年の捕囚が始

まりました。なぜ彼らが七十年間捕囚とされたのかは、歴代誌が説明しています。

ゼデキヤは即位したとき二十一歳で、エルサレムで十一年間治めた。彼は自分の神、主の目に悪とされることを行い、主の口から語る預言者エレミヤの前にへりくだることをしなかった。彼はまた、彼に神によって誓わせたネブカドネザル王にそむいた。彼はうなじを固くし、心を頑なにして、イスラエルの神、主に立ち帰ろうとしなかった。さらに、祭司の長たちも民も皆、異邦人のあらゆる忌むべき行いにならって甚だしく不義を行い、主がエルサレムで聖別された主の宮を汚した。先祖の神、主は、その使者たちをしばしば、また早くから彼らのもとへ遣わされた。民とその住まいをあわれまれたからである。しかし彼らは神の使者たちを嘲り、そのことばを侮り、その預言者たちを虐待し、ついに主の怒りがその民に向かって燃え上がり、もはや癒しの余地がなくなるまでになった。それゆえ主はカルデヤ人の王を彼らの上に来させた。彼は彼らの聖所で若者たちを剣にかけ、若い男にも娘にも、老人にも、年老いてよろめく者にも、いっさいあわれみをかけなかった。主は皆を彼の手に渡された。神の宮の器物の大小すべて、主の宮の宝物、王とその高官たちの宝物、これらはみな彼がバビロンへ持ち去った。彼らは神の宮に火を放ち、エルサレムの城壁を打ち壊し、そのすべての王宮に火をつけ、そのすべての貴い器物を滅ぼした。剣をのがれた者たちは彼がバビロンへ捕え移し、彼らはペルシャの王国が治めるに至るまで、彼とその子らに仕える奴隷となった。これは主のことばがエレミヤの口によって成就するためであり、地がその安息を楽しむまで、荒れ果てている間ずっと安息を守り、七十年を満たすためであった。さて、ペルシャの王クロスの第一年に、主がエレミヤの口をもって語られたことばが成就するために、主はペルシャの王クロスの心を奮い立たせ、彼は全王国に布告を出し、これを文書にもして言った。「ペルシャの王クロスはこう言う。天の神、主は地上のすべての王国を私に賜った。主はユダにあるエルサレムで、ご自分のために宮を建てよと私に命じられた。あなたがたのうち、その民すべての者の中で、誰がいるなら、その者の神、主が彼とともにおられるように。彼は上って行くがよい。」歴代誌下 36:11-23。

奴隷の身で過ごした七十年は、エレミヤの言葉、すなわち「地がその安息を享受するまで、荒れ果てている間はずっと安息を守った」を成就するためのものだった。ここで引用している歴代誌の一節を除けば、神の御言葉の中で、地がその安息を「享受する」ことに言及している箇所は一つしかない。その箇所はレビ記二十五章と二十六章にある。二十五章は、地にその安息を享受させる方法を定め、二十六章は、その契約の定めに従わなかった場合の「七倍」の呪いを概説している。

ヨヤキムの運命は捕囚の始まりを示し、その捕囚は、ダニエルが九章でモーセの「呪い」と「誓い」と呼んだものの一部をなす。ダニエルは「七つの時」の呪いを理解していた。というのも、彼は九章で、エレミヤの七十年の預言を学ぶことによって、神の民がバビロンで奴隷とされる年数を理解したと証言しているからである。

彼の治世の第一年に、私ダニエルは、書物によって、預言者エレミヤに臨んだ主の言葉にある、エルサレムの荒廃が七十年で満ちるという年数を悟った。ダニエル書 9:2

ダニエルは七十年のことを「書物によって」理解したが、それはエレミヤ書だけではなかった。彼が理解していたもう一つの書はモーセの著作である。というのも、彼は祈りの

中で、七十年の捕囚の「呪い」がモーセの「誓い」であったことを述べているからだ。ダニエル書九章で「誓い」と訳されている語は、レビ記二十六章で「七倍」と訳されている語と同じである。現代のどんな神学者が何と言おうとも、ユダがバビロンで七十年捕囚となったことは、「七倍」の呪いの成就であった。見ようとするなら、火を見るより明らかだ。

主はシナイ山でモーセに仰せになった。「イスラエルの子らに告げて言え、『わたしがあなたがたに与える地に入るとき、その地は主のために安息を守らなければならない。六年の間、あなたは畑に種をまき、六年の間、ぶどう畑を剪定し、その実を集めることができる。しかし第七年は、その地のための全き安息、主のための安息である。あなたは畑に種をまいてはならず、ぶどう畑を剪定してはならない。あなたの収穫のうち自然に生え出たものを刈り取ってはならず、手入れをしていないぶどうの木がぶどうを集めてはならない。これは地のための休息の年であるからだ。地の安息に生えるものは、あなたの食物となる。あなた自身、あなたの男奴隷、女奴隷、雇い人、あなたと共に宿る寄留者のために、またあなたの家畜、あなたの地にいる獣のためにも、その出るものは皆、食物となる。あなたは自分のために安息年を七たび、すなわち七年を七度数えよ。こうして安息年七回の期間は四十九年となる。そのとき、七の月の十日に、贖罪の日に、あなたがたは全土でヨベルの角笛を鳴り響かせなければならない。』」 レビ記 25:1-9

土地を休ませるという規定において重要なのは、土地を六年耕し一年休ませるという周期を七回繰り返し、それが第四十九年まで続き、そのとき七年を七回重ねた周期の成就を示すヨベルの年が設けられていた、という点である。肝要なのは、ヨベルのラッパが贖罪日に吹き鳴らされることになっていったということであり、したがって1844年10月22日に反型の贖罪日が始まったとき、「七つの時」の周期を表すヨベルのラッパがその時に吹き鳴らされるはずであったと示される。紀元前677年にマナセがバビロンに連行されたときに始まった「七つの時」は、二千五百二十年を表しており、反型の贖罪日に終結した。この関連は、見ようとしないう者だけが見落とすだろう。「七つの時」の周期は二千三百年と結びついている。

また、レビ記二十五章の最初の九節にある契約規定の中に、神の言葉における一日一年の原則の最も深遠な例証があることを見て取ることも重要である。神学者たちが群れをバビロンの酒で酔わせたままにしておくために差し出す作り話のご馳走とは、第二十六章の“seven times”という裁きは、“seven times”と訳されている語のヘブライ語の意味を誤解したものだ、という主張である。その主張は正しくない。その語のヘブライ語としての意味自体に、数値的に適用する根拠は十分に含まれているが、彼らが自称するヘブライ語文法の専門性に基づいた誤った前提で支えようとするその欠陥ある議論は、単なる論点そらしにすぎない。

第26章で「七たび」として示されている裁きは、一部の現代の神学者がヘブライ語をねじ曲げることによってではなく、その箇所文脈によって理解される。ウィリアム・ミラーはヘブライ語を一切参照することなく結論に至り、靈感は彼の理解が正しいことを是認した。天使たちは、「七たび」の裁きが置かれているその章の文脈に基づいて彼の理解を導き、ヘブライ語に基づいて理解させたのではなかった。

第二十五章では契約の指示が示され、続く第二十六章ではそれらの指示を守ることに対して約束された祝福が述べられ、その後、それらの指示に背くことについて、ダニエルが「モーセの呪い」と呼ぶものが示されている。

文脈は、聖書の預言における「一日は一年」の原則という主題である。レビ記25章の冒頭の数節は、聖書の預言では一日が一年を表すことを示している。出エジプト記では、モーセが、人と家畜のための第七日の安息と、土地のための第七年の安息との関係を明確に示している。

六年のあいだ、あなたは土地に種をまき、その産物を集めなさい。しかし第七年には、それを休ませ、耕さずにおきなさい。あなたの民の貧しい者が食べるためであり、彼らの残したものは野の獣が食べる。ぶどう畑とオリーブ畑についても同様にしなさい。六日のあいだ、あなたは仕事をし、第七日には休みなさい。あなたの牛やろばが休み、あなたのはしための子と寄留者も憩いを得るためである。出エジプト記 23:10-12

それらの三節の中には、人と家畜のための休息の日が、土地のための休息の一年に相当することが認められる。レビ記25章の最初の5節には、出エジプト記20章8節から11節の安息日の戒めと同一の文法構造が見いだされる。

主はシナイ山でモーセに語られ、こう言われた。「イスラエルの人々に言いなさい。『あなたたちが、わたしがあなたたちに与える地に入るとき、その地は主のために安息を守らなければならない。六年の間、あなたは畑に種をまき、六年の間、ぶどう畑を刈り込み、その実りを集めることができる。しかし第七年は、その地のための全き休み、主への安息である。あなたは畑に種をまいてはならず、ぶどう畑を刈り込んではいならない。あなたの刈り入れのあとに自生したものを刈り取ってはならず、手入れされていないぶどうの木の実を集めてもならない。これはその地のための安息の年である。』」レビ記 25:1-5

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、第七日はあなたの神、主の安息である。この日には、あなたも、あなたの息子も娘も、あなたの男のしもべも女のしもべも、あなたの家畜も、あなたの門の内にいる寄留者も、どんな仕事もしてはならない。主は六日のうちに天と地と海とその中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。ゆえに主は安息日を祝福し、これを聖別された。出エジプト記 20:8-11。

安息日と安息の年に関する二つの戒めを合わせて見ると、レビ記二十五章と二十六章の文脈が明らかになる。これらを節ごとに重ね合わせると、「六日のあいだは働いて、あなたのすべての仕事をせよ」、また「六年のあいだはあなたの畑に種をまき、六年のあいだはぶどう畑を剪定し、その実りを取り入れよ」と証している。「しかし七日目は、あなたの神、主の安息日である」そして「七年目は地のための安息の年、主への安息である」。

人への安息日の戒めであれ、土地のための安息日の戒めであれ、どちらにおいても「第七」と訳されている語は、レビ記26章で「七倍」と訳されているのと同じヘブライ語である。レビ記25章と26章の文脈は、聖書の預言では一日が一年を表すという預言の規則のもとに位置づけられている。同様に重要なのは、「初出の法則」という預言の規則である。

これら二つの章で最初に述べられているのは、一日を一年とする原則である。ウィリアム・ミラーは、ガブリエルと他の天使たちに導かれて、レビ記の「七回」を二千五百二十年の象徴としたが、これは、二十五章の冒頭五節に示されている一日を一年とする原則という、これらの章の文脈と完全に一致している。

歴代誌の著者は、バビロンが南王国ユダを捕囚にすることが許された理由を示し、それは土地にその安息を享受させるためだと言った。神の言葉の中で、土地が休みを享受することに言及しているもう一つの箇所は、レビ記25章と26章にある。聖書の預言における第一の王国としてバビロンが支配した七十年は、聖書の預言における第六の王国として地の獣が支配する象徴的な年数を表しているだけでなく、その七十年自体がモーセの呪いの「七つの時」を直接指し示している。

ダニエル書の最初の六章に示されている預言を学び始めるにあたっては、「七つの時」の呪いと祝福の双方が、これら各章の要素となっていることを知っておくことが不可欠である。

また、七年の周期を七回数える周期は、第七の月の十日、すなわち贖罪日にヨベルのラッパが吹き鳴らされることによって示されていることを覚えておくことも重要である。この事実は、「七つの時」をダニエル書8章14節の2300日と結びつける。また、預言における一年は360日であり、その360日を「七つの時」にわたって繰り返し足し合わせると2520日になることを覚えておくことも重要である。

ダニエルが、書物によってエレミヤが示していた年数を悟ったとき、彼は祈り始めた。それは、もし神の民が自分たちが敵の地で捕囚の身であるという現実を目覚めるなら必要であると示されている、悔い改めの応答のあらゆる要素に言及する祈りであった。ダニエルのレビ記26章の祈りの終わりに、ガブリエルが現れ、彼が「聞いた」二千三百日の幻について理解を与えた。ガブリエルはまず、ダニエルの民のために七十週が「定められている」とダニエルに告げた。

あなたの民とあなたの聖なる都について、背きを終わらせ、罪に終止符を打ち、咎に対する贖いを成し遂げ、永遠の義をもたらし、幻と預言を封印し、至聖所に油を注ぐために、七十週が定められている。ダニエル書 9:24

その節で「determined」と訳されている語は「切り取る」を意味し、したがって、二千三百日のうちから七十週が切り取られることを意味する。紀元前457年の第三の勅令から始まり、ダニエルの民には猶予期間として預言的な七十週が与えられることになる。預言的な七十週は四百九十年に等しい。第三の勅令から四百九十年後、古代イスラエルは34年にステパノを石打ちにし、彼らは完全に神から離縁されることになる。

四百九十年の猶予期間の起点を示す三つの勅令に先立つ捕囚は七十年に及んだ。その七十年は、古代イスラエルが守らなかった地の安息を地が得るためのものだった。地のための七十年の安息は、モーセの誓いに対する四百九十年（すなわち年の七十週）にわたる反逆のゆえにもたらされた。

レビ記25章の契約に対する反逆が490年続いた結果、地がその安息を享受するために70年の捕囚がもたらされた。70年の捕囚は三つの勅令へとつながり、それによって古代イスラエルに対するさらに490年の猶予期間が画された。こうして、490年ずつの猶予期間が二度あったことがわかる。三つの勅令は三天使のメッセージを象徴しており、その第一は1798年、北王国に対する「七つの時」の第一の憤りが終わる時に到来した。第三の天使は、第三の勅令から2300年後の1844年10月22日に到来し、その時に「憤りの最終的な終わり」もまた到来した。

最初の怒りの終結から最後の怒りの終結までの四十六年間に、イエスはミラー派の神殿の基礎を据え、その礎石は「七つの時」であった。その石は、初めにはアドベンチズムにとっての礎石、さもなくばつまずきの石となり、終わりにはアドベンチズムにとっての頭石と頂石、さもなくば墓石となるはずのものであった。1798年から1844年に至る歴史の中で三天使のメッセージの到来を表す三つの勅令は、ダニエル書の最初の三章をも表している。

次の記事では、最初の六章の考察を始めます。

「ダニエル書とヨハネの黙示録がよりよく理解されるとき、信徒はまったく異なる宗教体験をするようになる。……黙示録の研究から必ず理解される一つのことは、神とその民との関係が密接で、しかも確固たるものであるということである。」『私の生きる信仰』345ページ